
芸術とリテラルなもの——グレアム・ハーマンと演劇性の美学

折居耕拓(金沢美術工芸大学)

本発表では、現代アメリカの哲学者グレアム・ハーマン(Graham Harman, 1968-)が2010年代以降に展開してきた美学理論をとりあげる。

ハーマンは自身の哲学を、オブジェクト指向存在論(Object-Oriented Ontology)、ないしはこの略称OOO(トリプルオー)として掲げる。OOOとは、生物・無生物、有機物・無機物を問わず、地球上のあらゆる事物を「オブジェクト」として解釈したうえで、オブジェクト間の関係の下に、すべての存在者の実在を捉えるという立場である。

こうした方向性においてハーマンが、「唯物論では解決にならない——物質、形式、模倣について」(2014)等の2014年以降の著作において打ち出し始めた概念が2つある。第1の概念が形式主義、第2の概念が隠喩である。

ハーマンは、オブジェクトはばらばらに独立して存在しており、オブジェクト間の関係には汲み尽くされないという自身の着想の源泉を、戦後アメリカにおける形式主義の美術批評に見出しながら、しかし必ずしも人間という主体を前提しない新たな形式主義を立ち上げようとする。ロバート・ジャクソンを筆頭とするこれまでの研究は、ハーマンが一方で、唯物論を擁護する同時代の傾向に對抗しながら、他方で、美術における狭義のモダニズムに寄与しない形式主義を提起することに注目してきた。

だがハーマンの目的は、物質／形式という伝統的な対立を強化することにはない。彼は最終的に、これらの対立に絡め取られることのない側面から芸術を把握する。そこで提示されるのが、隠喩の概念である。ハーマンは、互いに独立しながらもしかし遭遇する複数のオブジェクトを記述するものとして隠喩——たとえば、「ワイン色の海」——を導入し、隠喩が実在への「間接的なアクセス」を可能にすると論じる。言い換えれば、リテラルなもの、つまり字義通りのもの(the literal)ではなく隠喩によってこそ、オブジェクト同士の暗示的なかわりを描き出すことが可能になる。注目すべきは、ハーマンが、隠喩における2つのオブジェクトの遭遇のありようを、「メソッド演技法のような演劇的な意味において」、「模倣」として論じていることである。すなわちハーマンにおいて芸術を特徴づけるのは、リテラルなものではなく、演劇的なもの(the theatrical)である。

以上のように本発表では、①オブジェクトを基軸とするハーマンの哲学体系を素描したのちに、②まずは形式主義の概念、③ついで隠喩の概念に着目することをとおして、最終的には<リテラルなものへの抵抗>として芸術>という定式を抽出する。これらの議論をとおして、ハーマンにおけるいわば演劇性の美学を、人間を特権的な主体として据えることのない美学=感性論を導き出すための、新たな視座として提示する。